

## 福祉と開発の人間的基礎

——森有正のレゾナンス——

岡 田 徹<sup>1)</sup>

### 要 旨

本稿では、「福祉と開発の人間的基礎」を、森有正というわが国では稀有の思想家、哲学者の人間思索をとおして考究した。

「福祉と開発」だけであれば、もとより森有正の出る幕はない。が、ここでは《人間的基礎》の方に力点が置かれているので、人間思索は欠かせない。ここに取りあげた森有正は、《感覚－経験－思想》という独自の思惟の道筋を辿<sup>たど</sup>って人間の生成と存在について思索と省察をかさね、多くの作品を生み出した。

ここでは具体的に「人間が人間になる」という、森有正の根本命題を読み解きながら「福祉と開発の人間的基礎」、わけても《人間的基礎》に当たるものが何であるかを考究した。そしてそこから引き出された知見や智慧は、こういうことであった。

——すなわち、福祉も開発も元々「人間に始まり人間に終わる」、すぐれて人間的な事実であり事象である。そうである以上、「福祉と開発」を人間事象に還元し、そして人間の在り方や生き方の問題として捉え直す必要がある。それも人間一般ではなく、一人ひとりの人間（人格）の《固有－普遍》のいのちと存在を、「福祉と開発」の中に定位させることである。その上でそれを促すような「福祉と開発」を志向することである、と。

「福祉と開発の人間的基礎」の核心を衝<sup>つ</sup>く、森有正の「人間が人間になる」という命題から福祉や開発が学ぶことは決して小さくはなかった。

キーワード・コンテキスト：福祉と開発，人間的基礎，レゾナンス（内なる響き），

薔薇 おお！——ことばが破れる——，

人間思索《感覚－経験－思想》

## 目次

### 1. 序論

#### 1-1 表題にふれて

#### 1-2 本稿の課題

#### 1-3 本稿の構成

### 2. 福祉と開発の人間の基礎

#### 2-1 ふたたび、表題にふれて

#### 2-2 福祉と開発の包摂統合——地球の見地に立った人間福祉

#### 2-3 人間の基礎

#### 2-4 副題——森有正のレゾナンス

### 3. 森有正のレゾナンス——森有正から聴きとった《内なる響き》

#### 3-1 えたいの知れぬ願い

#### 3-2 感覚をとおした思索

#### 3-3 リルケの刻印

#### 3-4 ことばが破れる

#### 3-5 薔薇、おお！

(以上、今回掲載分)

(以下、次回掲載分)

### 4. 人間思索——《感覚－経験－思想》

#### 4-1 感覚

#### 4-2 経験

#### 4-3 思想

### 5. 「福祉と開発の人間の基礎」再定義にむけて

### 6. 結論——「人間が人間になる」

あとがき

【補遺】 1. ルクセンブルグの古城に永久保存された《The Family of Man》の写真美たち  
——人間の定義——

2. トタン屋根をたたく雨音をきくのがうれしい——バングラデシュ,  
そのむき出しの魂の《美》たち——

## 1. 序論

### 1-1 表題にふれて

本稿の表題である「福祉と開発の人的基礎」は、筆者が日本福祉大学大学院国際社会開発研究科において2015年度から新たに担当している講義科目の名称である。筆者は2002年度から「国際福祉開発論」という科目名で非常勤講師をつとめてきたが、ある事情で2015年度から現在のこの科目名に変更した。

ところで、講義科目の名称がそっくりそのまま論文の表題になるのは珍しく奇異に映るかもしれないが、実は順序は逆である。筆者がかねてから提唱してきた「福祉と開発の人的基礎」という問題機制（問題の立て方、視点とアプローチ）が先にあり、それが当該大学院の講義科目の名称として採用されたのである。想うに、こちらのほうが珍しいといえる。

事実、受講者からも変わった科目名だと受けとられているようである。筆者にもそういう懸念がなかったのも「福祉と開発の人的基礎」、わけでも《人的基礎》ということについて自らの考えを公表してきた。<sup>2)</sup>今回ここにまた、新たに「森有正のレゾナンス」という副題の下にその明確化をはかり、もって特異な科目名をあずかった筆者の責めの一端をふさいでおきたいと考えた。

### 1-2 本稿の課題

本稿の課題は、森有正という一人の思想家、哲学者から筆者が聴きとった《内なる響き》——森有正のレゾナンス——を手がかりにして「福祉と開発」、わけでもその「人的基礎」を考究することにある。

「福祉と開発」だけであれば、もとより森有正の出る幕はない。が、本稿は「人的基礎」をめぐる考察という、もう一つの重要課題を抱えているので人間思索には定評のある森有正の登場を願ったしだいである。森有正は、その瑞々しい<sup>みずみず</sup>《感覚》を発条にして、深い人間思索を重ね多くの作品を生み出した、わが国では稀有の哲学者であり思想家である。

ここでは、森有正の根本命題である「人間が人間になる」ことを、《感覚—経験—思想》という独自の思索の道筋に沿って考察する。福祉と開発の中においてさえ「人間の忘却」が見え隠れする今日の状況にあっては、この人間思索ははなはだ重要な意味合いをもっていると、筆者は考えている。

ところで、森有正は「人間が人間になる」ということを、どんなふう考えていたか、それを端的に示す二つの文章がある。

ひとつは、次のような短い一文である、

人は一人一人自分で人間にならなければならない。<sup>3)</sup>

そしてその5年後に、その核心を衝くような言説が見られる、

僕の心を今捕えているのは、何かが生れる、ということである。人はすでに生れてきている。ただ「人間」の誕生は終っていない。あるいは死が本当の誕生の刻印なのかも知れない。美ということは一つの誕生の証しとしてそういうことと深く関連しているのかもしれない。肉体の誕生が人間の誕生なのではない、ということを告知することによって。<sup>4)</sup>

ここには《美》が重要な意味合いをもって登場するが、今は触れないことにする。要するに、森有正はこう言いたかったのだろう、

——われわれ（そして私）はこうして人間に生まれてきて人間として生きてはいるものの、ほんとうは未だ人間になっていない、われわれは一人ひとり自分で人間にならなければならない。これはわれわれが一個の全生涯をつうじて取り組むべき大仕事である、と。

多少筆者の私見が入っているかもしれないが、おおむねこういう趣旨であろう。

森有正から投げかけられた根本的な問いかけ、ないし疑義の衝撃力は、決して小さくない筈である。われわれ（そして私）はこれにどう応えたらよいのだろうか。

そしてここから「福祉と開発」を構想するとすれば、果たしてどういうことになるか、——これが本稿の課題である。

### 1-3 本稿の構成

本稿の構成は、この序を受けた本論で取り組まれるふたつの個別課題から成る。ひとつは、「福祉と開発の人間的基礎」という、筆者が専門とする「国際福祉論」に関連する主題ないし課題についての論及であり、もうひとつは、副題の《森有正のレゾナンス》を聴きとり、人間思索することである。そして最後に、森有正のレゾナンスから引き出された知見や智慧を、「福祉と開発の人間的基礎」の再定義にむけて還流させる試みである。

## 2. 福祉と開発の人間的基礎

### 2-1 ふたたび、表題にふれて

筆者は、2009年前後から「福祉と開発の人間的基礎」という構想を提唱してきた。

その直接のきっかけはバングラデシュで行なった講義にある。これは1999年度以来、毎年続けてきた立教大学正課授業「フィールド・スタディ——バングラデシュへの旅」の定年退職による終幕近くの2008年夏、バングラデシュの農村開発の現地NGO「パプリ」のバセド所長から職員研修の依頼を受けたことに端を発する。その時、筆者が付けた題目が「社会開発の人間的基礎」であった。これは《人間》を中心に据えて社会開発を考えるという筆者のモチーフを成句化したものである。<sup>5)</sup>

この段階では未だプリミティブな域を脱し切っていなかったが、その後、本務校の立教大学はもとより、非常勤（兼任）講師を勤めた本大学院をはじめ、明治学院大学国際学部、明治大学大学院文学研究科などの授業の中で考察を重ねてきた。その間、社会開発を「福祉と開発」と更新し、——「福祉と開発の人間の基礎」とした。そしてそれが2015年度から日本福祉大学大学院の科目名へと繋がった訳である。このことは先に記したとおりである。

## 2-2 福祉と開発の包摂統合——「地球の見地に立った人間福祉」

表題の「福祉と開発の人間の基礎」は「福祉と開発」と「人間の基礎」との二つに分節化される。

ここではまず「福祉と開発」から取りあげる。

ここでいう福祉とは、「社会福祉」（社会保障を含む）のことであり、それは主に世界の4分の1を占める経済・産業先進諸国（いわゆる「北」）でとられている理念とシステムの通称である。また開発は「社会開発」（人間開発を含む）のことであり、それは世界の4分の3を占める途上国（いわゆる「南」）におけるそれらの通称である。世界はこの分野や領域においても、産業社会化や資本制社会化が進展している経済的に豊かな「北」と、対極的な「南」とに二分される。

1990年前後、東西冷戦構造の崩壊後、それまで東西対立の陰に隠れてやや存在感の薄かった南北の対立構造が顕になってきた。1995年コペンハーゲンで開かれた「国連社会開発サミット」がそのことを如実に物語っている。

筆者の専門は福祉系の「国際福祉論」であるが、その頃から開発系の「国際開発論」を視野に収めた《地球規模の福祉》を構想しつつ、教育・研究・実践に携わってきた。その中からひとつは、「福祉と開発の包摂統合」という取り組み課題が浮上してきた。福祉と開発はもともと、その発生機序も生成展開の過程も、そしてその適用地域も、さらに教育・研究・実践等の方法や対象も大きく異なっている。しかしながら、両者は競合し対立し合いながらも相補的・互酬的・共生的な関係のもとにあり、今日ではその包摂統合は南北問題の克服にも一脈通じる重要課題となってきた。

いまひとつは、この「福祉と開発の包摂統合」が、筆者の場合、上位概念にあたる「地球の見地に立った人間福祉」の提唱へと繋がった。前者「福祉と開発の包摂統合」がいわば地球大の《広さ》の福祉であるとすれば、後者「地球の見地に立った人間福祉」はたんに《広さ》だけではなく《広さ・高さ・深さ》を併せもつ福祉といえよう。その理由は、《人間》が入っているからである。人間が入ることによって《高さ》と《深さ》が実相を帯びてくる。この「地球の見地に立った人間福祉」を世に問うために、筆者は『コミュニティ福祉学入門——地球の見地に立った人間福祉』を刊行し、その終章に収められた拙稿「地球の見地に立った人間福祉——グローバル・コミュニティの福祉と開発」でその構想の一端を呈示した。<sup>6)</sup>

「地球の見地に立った人間福祉」は、《地球の見地に立つ》と《人間福祉》とに分節化される。前者の《地球の見地に立つ》とは、言うまでもなく地球大のパースペクティブをもつことであ

り、「広さ」の福祉がそれにあたる。が、同時にここには《立つ》という、人間の実存的な在り方や生き方の水位が組み込まれている。自己や他者そして世界に向けた人間の「構え」や「開け」の問題がすなわち、これである。——ただし、「地球の見地に立つ」からと言っても何も、地球の反対側までボランティア活動に出かけなければ、地球の見地に立てない訳ではない。が、筆者と一緒に12年間、「フィールド・スタディ——バングラデシュへの旅」を共にし、じかに現場に立った160数名の若者たちの心の奥底では、今なおバングラデシュが響き合っていることだろう。そのことを想うと「現場に立つ」ということの重要性はやはり小さくない。要は、人間が生きる上での心構えや志の問題である。

他方、後者の「人間福祉」とは、字義通り「人間」が主題化された《広さ・高さ・深さ》の福祉を意味する。こちらは少し踏み込んだ説明が要る。

筆者のいう「人間福祉」（ないし「人間的基礎」）とは、言葉や制度、もっと卑近な物や金に自己疎外させない、一人ひとりの人間の《固有—普遍》のいのちと存在、そしてその基底にとどくような福祉のことをいう。とは言ってみても、これでは未だ曖昧さが残り、定義になっていない。ここに呈示した「人間福祉」の定義は作業仮説であり、暫定的な操作的定義である。本論の最後のところで、「森有正のレゾナンス」から引き出された知見や智慧をもって「福祉と開発の人間的基礎」の再定義を試みてみたい。

### 2-3 人間的基礎

以上みてきたように、「福祉と開発の人間的基礎」にせよ「地球の見地に立った人間福祉」にせよ、いずれも「人間」が主題化されている。

筆者はこれまでも、「北」（先進国）と「南」（途上国）との対立を超脱しうる地平や地点を摸索してきた。今回は「森有正のレゾナンス」をとおして、人間の《いのちと存在》の基底に測鉛をおろして人間思索を試みることにする。

### 2-4 副題——森有正のレゾナンス

この副題は、森有正が書いた「リールケのレゾナンス」に<sup>あや</sup>綺かって、筆者が付けたものである。詳しいことはこのすぐ後で述べる。

森有正は先に述べたとおり、《感覚—経験—思想》という独自の考えにもとづいて人間思索を試みた哲学者であり思想家である。この稀有な人格性とその魂を活かすには、その取りあげ方にもそれなりの工夫が要ると、筆者は考えている。これが副題を「森有正のレゾナンス」——森有正から聴きとった《内なる響き》——としたゆえんである。読み手であれ書き手であれ、自己を括弧に入れたまま森有正を読んでも論じて始まらない。それに、森有正を学術論文仕立てにして、対象客観的に分析し論ずるには余りにももったいない話である。なぜかと言えば、森有正の膨大な著作、——日記や書簡、エッセーはすべて人間を根源から問う<sup>あや</sup>作品たちだからである。これが筆者の、森有正に向かう基本的視座である。

そういう意味で言えば、本論はいわば、筆者の、森有正との《内面对話》である。どんな音色が奏でられるか、どんな調性が響きわたるか。

### 3. 森有正のレゾナンス——森有正から聴きとった《内なる響き》——

#### 3-1 えたいの知れぬ願い

ところで、森有正はいつ頃から「一回限りの自分の生を徹底的に生きたい」と思うようになったか、「巴里私記」の中にそのことを示す興味深いエピソードが綴られている。

今から26年前、パリに赴くに当って、私は3つのことを漠然と考えていた。(……)第一に、私はこの機会に、自分の専門としているフランス古典思想の、なかんずくデカルトとパスカルとの、研究を本場の現地で若干深めたかった。それについての具体的な仕事の内容まで予定し、それを終えて1年後には帰るつもりであった。第二に、それとは全然別に、かなり漫然とではあるが、自分がその中に生まれ生きて来た日本とその文化とを(自分をもそこに含めて)、外部から客観的に眺めたいと思った。(……)最後に、私にはかねて秘かな願いがあった。それは唯一回限りであるこの自分の生を徹底的に生きたい、というえたいの知れぬ願い、殆んど祈願にも似た、願いがあった。それがパリ留学と奇妙に結びついた。どうしてそういうことになったのか、その結びつきの必然性は私にとって未だに不可解である。ただこの結びつきが、船が日本を離れた後で起ったことだけは確かである。私はそういう結びつきを自覚してマルセイユ行きの船に乗ったのではなかった。航海中のある日、ある時刻に、この結びつきが突然、動かすことのできない事実として意識に上ったのである。すなわち私の中にそれが成立したのである。1950年の8月の下旬か9月の上旬のある昼下りのことであった。私が乗っていたラ・マルセイエーズ号はコロンボから東アフリカ・エチオピアへの入口、当時の仏領ソマリのジブティに向っていた。昼食後の一とき、コーヒーをバーで飲んでから、日除けの掩幕に覆われた後甲板の籐椅子に身を伸ばして、船尾から泡立つ白い航跡が水平線まで長く延びて行く、光に溢れる真昼の海面を私は眺めていた。頭の真上には雲一つない空に赤道の太陽が眩しいばかりに輝き、蒼黒い大洋は大きいうねりとなって律動しながら目のとどく限り広がっていた。ふと、その時、自分の生きる願いとこの航海とが私の中で一つに結びついた。それは一つの啓示のようなものであった。意志的なものでも、反省的なものでもなかった。(……)正にそれは一つの感覚(サンサシオン)であった。啓示はそれで終わった。<sup>7)</sup>

引用が長くなったが、理由は森有正の場合、情景描写や抒情表現が抜け落ちると、小説を要約や抄録で読むようなものになり作品の<sup>てい</sup>体を成さないからである。それと今一つ注意を要することがある。それは、このエピソードが往時を回顧して1970年代初め、晩年に差し掛かった森有正



によって書かれていることである。森有正の場合、時制はきわめて重要である、——日記や手紙は現在時で書かれていることが多いが、エッセーなどそれ以外の文章ではここに見られるように回顧ないし追憶・追懐の形式をとることが多い。これもまた森有正の、広い意味での文・体・上の特徴を成していると言えよう。それはまた森有正の《経験》概念がそうさせるのかもしれない。そのことを、森有正は《過去相に戻る》と言って丁寧な言葉を添えている。

わたくしが《過去》とか《過去相》とか《過去相に戻る》とかいう些か奇妙な表現に託している意味はあなたにも判ったと思う……。ただ強調しておきたい点は、この《過去》の意味を深める必要があるということである。過去とは既に終わり我々の手の及ばぬ何物かである。そこでは凡てが決定的なかたちを帯びている。今の一瞬が決定的なものであるかのよう<sup>・</sup>に生きること、否、かのようにはない、端的に決定的なものとして生きるのである。《決定的》になった生を自由に生きること……。

(……) このように考えると、わたくしは、修道士たちが自らの《過去》を絶えず生きているサン・ブノワ・シュール・ロワールに想いを馳せずにはいられない。過去！それは《未来》の空間に投影された大いなる夢に対応するものである。<sup>8)</sup>

「生とは現在時が過去相へと遡りそれが未来へと投企するものである」とか「《決定的》になった生を自由に生きること」という、森有正の時間論による生の定義はいずれも興味深い。わけでも、この「《決定的》になった生を自由に生きること……」と書いて引き合いに出されている「サン・ブノワ・シュール・ロワール」修道院の修道士のことについては、後に筆者の同修道院のエピソードを交えてやや詳しく触れる。

ところで、話を元の文脈に戻して、先の引用文を少し仔細に見てみる。

ここにある「第一の願い」をそのまま成就していれば、立派なデカルト学者、パスカル学者になって名声を博したことであろう。上述したように、森有正は事実、フランスへ出かける前にすでに『デカルトとパスカル』という学術書を刊行している。だからすでに名声を博している。「第二の願い」をそのまま成就していれば、和辻哲郎『風土——人間学的考察』(1929-1935年、岩波文庫)や梅棹忠夫『文明の生態史観』(1957年、中央公論社、)のような、すぐれた比較文化論を展開したであろう。ただしそうであれば、「人間がいかに生きるか」をテーマとする本稿に、森有正が登場することはない。

問題は「第三の願い」である、これは実に厄介である。厄介とは言っても、この第三の願いは人間が生きる上で欠くべからざる、きわめてまともで真摯な願いではある。

ここで「厄介である」と筆者がいうのは、森有正自身も認めるように《自分の生を徹底的に生きたい、え・たいの知れぬ願い》が一つの啓示であり、一つの感覚(サンサシオン)であるという点である。この感覚のことを、森有正は別のところでは「それは後に来るものを告げるサンサシ



オン（感覚）である』<sup>9)</sup>と述べている。このサンサシオン（感覚）こそ、後にみる「人間思索——《感覚—経験—思想》——」の出発点に当たる《感覚》である。

それが啓示（「内なる促し」）であれ、後に来るものを告げるサンサシオン（感覚）であれ、厄介といえ厄介な話である。しかもその上に、これまた必ずしも穏やかとはいえない「アヴェンチュール」（Aventure）であることを、自らの追懐をとおして突き止めているのだから、なお更のことである……。

〔アヴェンチュールとは〕未知の、しかも起りうる事態に対する根本的な「念願」と「不安」とが一体になっている、しかも本当はすでにその未知の事態に自分がのめりこんでいるのだということ（……）。<sup>10)</sup>

「すでにその未知の事態に自分がのめりこんでいる」というのも容易な話ではない。あるいは、こんな風にも表現している。

（……）冒険ということは、私どもが生きて行くということ、そのことを意味している。（……）生きて行くということは言い換えれば、冒険ということなのであります。そうでなければそれは死んだことであって、生きていることにならない。ですから人生は一つの冒険であるということの意味しながら、生きて行くこと、それが実は冒険という意味の一番基本にある広いまた深い意味であろうと思います。<sup>11)</sup>

さらに、旧約の「信仰の父」と呼ばれるアブラハムのことを念頭におきながら、その「冒険」を、こう語っている。

彼の生涯はその信仰のゆえに冒険そのものであったのであります。（……）信仰というのは人間の根本的な態度なのです。すなわち自分に起こってくる、あらゆるものの前に立ち上がり、それと対決すべきものは対決し、それを取り入れるべきものは取り入れ、学ぶべきものは学び、つまり自分でないものに自分の生活の軸を結びつけるということ、それが信仰ということであります。（……）キリスト教の信仰というのは、私どもがイエス・キリストに対してそういう関係を持って、それが信仰になる。（……）

冒険というのは実は自分の心の軸をほかのものに結びつけ、それとともに生き、それとともに学び、それとともに場合によっては苦しみ、その中から自分の魂を豊かにしてゆくこと、また、ほかを豊かにしてゆくこと、そういう道なのであります。ですから、ある意味で、冒険というのは自分でないある一つのものに結びつけられ、そのものに方向づけられるという面をもっております。しかしそれには自分がまず確立していて、それが自分でないも

のと結びつくのであって、封建的な人間関係とは全く異質であります。(……)

ですから、そういう冒険というものはいつでも決して私どものほうから求めるべきものではない。求められた冒険は決して冒険ではありません。冒険は文字どおり起こってくるものであって、私どもはやむなくその冒険に出会うのであります。<sup>12)</sup>

アブラハムが引き合いに出され、キリスト教信仰との関連の下で「アヴァンチュール（冒険）」を明らかにしてもらおうと、「ふと、その時、自分の生きる願いとこの航海とが私の中で一つに結びついた。それは一つの啓示のようなものであった」という引用文中にある《啓示》のもつ信仰上の真実味がより一層はっきりと伝わってくる。

このことは、同書の「あとがき」で書いているように――、

私という一個の人間が、たまたまキリスト信者であることによって、キリスト教信仰は私の経験と思想の中で重要な部分を占めている。それは私の書いたり話したりするあらゆるものに表われて来る。<sup>13)</sup>

この一文は森有正の死の1年10カ月前に書かれたものである。《死と信仰》がここでの隠れたモチーフともいえる。

筆者は森有正の信仰問題にやや不用意に踏み込んだが、今はこれ以上論及しない。これも後半の部分（「4. 人間思索——《感覚—経験—思想》——」）で再論、細論することになるだろう。

キリスト教信仰は森有正の「経験と思想」に、奥行きと深みを齎すことになることだけをここでは指摘しておきたい。

寄り道をしたが、いずれにしても、このえたいの知れぬ願いはその後、森有正のパリ生活、——パリでの歩みに深い翳<sup>かげ</sup>を落とすことになる。

パリ生活の第一期は（1950年～1960年頃）、とりわけ初期の数年間には苦難の多い時期であることは「森有正日記」（『森有正全集』第13巻）をみれば想像に難くない。また当の森有正自身、その間のことをこう述懐する。

以上に述べたような、新しい感覚に餓えたように貪りつく状態は約10年間続いた。そしてそれは私にとって決して愉快な時期ではなく、一連の重い歩み、暗黒の中を手さぐりで躡きながら歩むようなものであった。<sup>14)</sup>

がしかし、この時期、リルケや高田博厚に出会い、さらにブルーストやアラン、ルオーやジャコメティに出会って、こうした先達との、実際のあるいは書物の上での邂逅を通して、森有正はその最初期に哲学者として一個の人間として「どこから出発したらよいか」を深く悩み考え抜い

ていたことは推測に難くない。ほとんどフランス語で書かれている膨大な日記や書簡、初期の日録体のエッセーはある意味ではこの「感覚」の問題に収斂していると言っても言い過ぎではないように思われる。

そして辿り着いた地平・地点が、リルケの一篇の詩句「薔薇、おお！」（この後詳しく紹介する）、高田博厚が制作したルオーの頭部の彫刻、ルオー自身の「十字架上のキリスト」、ジャコメティの「歩く男」、そしてパッサンの「プレリュードとフーガ 変ホ長調」……、これらに匹敵する質感や量感をもった、森有正自身の《言葉世界》の作品であったと見ることができよう。例えば、その代表的な作品の一つが『バビロンの流れのほとりにて』である。

やがて、一連の重い歩みの中から、感覚から出発した森有正の前方に、経験を経て思想に辿り着く例の《感覚－経験－思想》という思惟の道程の全貌が霧の中から浮かび上がってくる。

人には誰しも自らの身に、森有正のような劇的な転回が起こるわけではないだろうが、それでも一人の人間が生きるということ、生きてここに在るということは大なり小なり、潜在的か顕在的かの違いはあっても、そして決定的に大事なことである行動に移すかどうかは別にしても、ここに言われるような「唯一回限りであるこの自分の生を徹底的に生きたい、というえたいの知れぬ願い」の胚珠を自らのうち裡に深く秘して生きているのではないだろうか。何も森有正のような「経験と思想」にたどり着く必要はない。このことは最後の「結論」のところで森有正が例示しているエピソードによって再論する。ただ森有正にひとつの典型をみるとすれば、それは誰でもが持っているような小さな胚珠に気づき、それを執拗に追求するという生き方であろう。そしてそれに言葉を与えて、われわれに見えるようなかたちで呈示してくれた点である。これは誰にでもできる話ではない。

この苦難の時代は同時に、森有正にとって最も瑞々しい感覚が発露する時期でもあったことは「日記」に実にきめ細かく書かれている。この「本当に自分の生を徹底的に生きたい」というえたいの知れぬ願いはやがて、こうした重い歩みをとおして少しずつ、「人間が人間になる」という根本命題へと繋がり、やがて「経験と思想」が象づけられていくことになる。

「感覚に餓えたように貪りつく状態」や、感覚の覚醒はリルケに出会ったことと少なからず関係しているが、しかし「第三の願い」に見られるようなえたいの知れぬ願いは森有正の場合、何もリルケに始まったわけではない。たとえば渡仏前に書いた『ドストエフスキー覚書』にみるような深い魂への洞察がこのことを教えてくれている。この点では森有正はじつに早熟だった。リルケの魂と共振する魂の原質を、森有正はすでに青年期や少年時代はもとより、遙か遠く、幼年時代から魂の奥底に秘めていたふしが窺える。

『バビロンの流れのほとりにて』の冒頭の一文は、このことを物語っている。

一つの生涯というものは、その過程を営む、生命の稚い日に、すでに、その本質において、残るところなく、露われているのではないだろうか。僕は現在を反省し、また幼年時代

を回顧するとき、そう信ぜざるをえない。この確からしい事柄は、悲痛であると同時に、限りなく慰めに充ちている。(……)

考えてみると、僕はもう30年も前から旅に出ていたようだ。僕は13歳の時、父が死んで東京の西郊にある墓地に葬られた。2月の曇った寒い日だった。墓石には「M家の墓」と刻んであって、その下にある石の室に骨壺を入れるようになっている。その頃はまだ現在ののように木が茂っていなかった。僕は、一週間ほどして、もう一度一人でそこに行った。人影もなく、鳥の鳴く声もきこえてこなかった。僕は墓の土をみながら、僕もいつかはかならずここに入るのだということを感じた。そしてその日まで、ここに入るために決定的にここにかえって来る日まで、ここから歩いて行こうと思った。その日からもう30年、僕は歩いて来た。<sup>15)</sup>

「僕もいつかはかならずここに入るのだということを感じた」森有正はすでに、40年前にパリで客死し「M家の墓」に入っている。

なお、この一文もまた、42歳の森有正が13歳の「僕」を追懷して書く例の形式(文体)が踏襲されている。

### 3-2 感覚をとおした思索

フランス滞在の初期から、<sup>かたわ</sup>傍らでみていた彫刻家の高田博厚は森有正のことをこう記す。

緻密な思考力を持っていた森は、たぶんフランスに来て「感覚」の意味を知ったと思う。彼はその初期にリルケの『マルテの手記』を手離さなかった。(……)そして森の場合よろこばしきことには、「感覚」の把握が「外界」によって始まったことである。すでに彼はフランス思考の領域内に入った。実感による思索、観念を否定するのではない、純粹観念を厳密に自我包摂するために実体によってそれ〔観念——引用者補〕を淘汰する。現代ではアランやヴァレリー、またベルグソンが大きな見本であるが、それを学びつつ森の中にパスカルとデカルトが新しく復活する。<sup>16)</sup>

高田博厚は芸術家だから、表現や語彙にも鋭い感性や詩情に溢れていて意味深長である。多少言葉を添えれば、こうなる。

ー 「感覚」の把握が「外界」によって始まったということ、

感覚の把握が自分の自由のきかない、効きにくい外部世界(実体、もの)との接触から始まったということの意味する。そして高田博厚はこのことを《フランス思考》と呼んでいる。

ー 「実感による思索」とは、感覚をとおした思索のことであり、「観念」や「命題」、要するに言葉による認識(説明と理解、解釈)ではないことを意味する。少なくとも、言葉が先行

しないことが大原則である。

- ー そして難解の極みともいえる「純粹観念を厳密に自我包摂するために実体によってそれ（観念——引用者補）を淘汰する」ということ、

普通の観念であれば、そもそも自我包摂する必要はないし、淘汰する必要もない。が、**純粹観念**なればこそ、厳密に自我包摂するためには「実体」（外界、もの）によって観念を淘汰する必要があるということだろう。

さらに釈義したい誘惑に駆られるが、ここで止める。詳しく知りたい人には著書『分水嶺』（岩波現代文庫、2000年6月16日刊）を見られたい。何よりも直に高田博厚<sup>じか</sup>の「彫刻」作品をも忘れずに！……。それは言葉から出来上がっているかもしれない。

森有正は「暗黒の中を手さぐりで躓きながら歩む」中で、パリに出会い、ノートル・ダム大聖堂やシャルトル大聖堂に出会い、詩人リルケや彫刻家高田博厚、ルオーと、哲学者アランや作家ブルーストに出会って「感覚」の目醒めをとおして思索を深めていった。

ところで、森有正は当初から、みずからの学問研究を「感覚」から始めたわけではない。戦中から戦後の数年間に書いた論文をまとめた『デカルトとパスカル』という学術書の冒頭「デカルトの懐疑」の書き出しの数行を引いてみる。

デカルトは極めて鋭い分析的、合理的思想家と考えられ、人は、明証性をもつ対象〔観念〕の確実なる直観を根柢とし、必然的演繹と総合とを内容とする秩序的方法および自覚的主体的精神と延長物体との実在的区別を、かれの思想の中核と考える。これはもとよりあくまでも正しい。しかしそれだけでは必ずしもデカルトの思想に関する事態を全面的に把握していることにはならないであろう。かれはその方法の適用において明晰、判明ならざる観念、もしくはそれに必然的に結合しない観念をあくまで排除しようとした。<sup>17)</sup>

これに対して、1950年パリに移り棲んで長い沈黙を破って書かれた『バビロンのほとりにて』の冒頭の数行は、先に引いたとおりであるが、文脈上、その一部を再引用する。

一つの生涯というものは、その過程を営む、生命の稚い日に、すでに、その本質において、残るところなく、露われているのではないだろうか。僕は現在を反省し、また幼年時代を回顧するとき、そう信ぜざるをえない。この確からしい事柄は、悲痛であると同時に、限りなく慰めに充ちている。(……)。<sup>18)</sup>

この二つの文例は、前者が1950年の渡仏前1947年に書かれたものであり、後者は渡仏後1953年に書かれたものである。そこには僅か6年の隔たりがあるだけである。その違いは単に

哲学論文かエッセーかという内容や形式（文体）だけにとどまらない。

森有正をよく知る多くの人はこの変化に驚きを禁じ得なかったという。たとえば、その一人の哲学者で、森有正の没後刊行された『森有正全集』編集者の一人である中村雄二郎はその驚きをこう評す。

わたしは、たとえば、『バビロンの……』や『流れのほとりにて』において、久しぶりに森有正氏の文章に接したとき、なによりもおどろかされ、これは大へんなことだと思ったのは、氏の日本語の文章の、とりわけ文体の変化であった。もちろん、ここで「文体」とは、単なる修辭的な技法にかかわるものではなく、精神の姿勢そのものを意味するにほかならない。『バビロンの……』以後の、辻氏のいう「思想的な文学作品」においても、森有正氏の文章は、硬質な、あるいは少なくとも硬質な核をもった文章であり、文体である。が、それは直接に概念的、観念的なものではなく、氏のいわゆる「経験」によって、あるいは「経験」そのものから、磨き出され、感覚的に息づいており、突っこんだ内容が語られ、論じられている場合でも、読者にとって——平易とはいえないにせよ——、親しみやすい。

その点、渡仏以前に書かれた文章は、なんといっても多分に概念性、観念性が目立ち、一種独特な晦渋さを持っていたことは否みがたい。<sup>19)</sup>

こうした驚きの声をあげた人は他にも少なくない。上記引用文中に名前の挙げた辻邦生もまた、その一人である。

『バビロンの流れのほとりにて』がミリオン・ブックスの一冊として出た1957年当時、これが現在みられるような壮大な規模をもつ思想的な文学作品になることを予測した人はほとんどいなかったと言ってよい。それは何もその本が小型のポケット版であるとか、また、その内容が書簡体による文化論、文明論であるとかいう理由からではなくて、この作品が内包する思想を真に理解するだけ、当時のわれわれの精神状況が成熟をとげていなかったためである。<sup>20)</sup>

以上見てきたように、森有正が「感覚」ということを強く意識するようになったのは、パリ生活の早い時期（1952～3年頃）、リルケに触れてからである。森有正自身、そのことを、次のように述べる。

もう20年近くも前、パリに来てから2、3年経った頃、自分でもはっきりとは把めない理由によって、リルケを何冊か読んだ。有名な「マルテの手記」を始め、「ドゥイノの悲歌」、「ロダン」、「若き詩人への手紙」、それからここに訳出した「フィレンツェ日記」など。<sup>21)</sup>

文中の「自分でもはっきりとは把めない理由によって」という点は、フランスへ向かうラ・マルセイエーズ号の船上で受けた啓示「えたいの知れぬ願ほろふつい」を髣髴させる。

### 3-3 リルケの刻印

リルケに就いては、そのレゾナンス（私の内部の共鳴）を語ることしか私にはできない。<sup>22)</sup>

これは森有正が書いた「リルケのレゾナンス」の冒頭の文章である。この一文は、1957年に翻訳したリルケ『フィレンツェ日記』を、1970年7月に『フィレンツェだより』と改題して再刊する際に、その「後記」として新たに書き下ろされたものである。小品とはいえ、なかなかの力作である。

これを承けて同巻編集部は、森有正「リルケのレゾナンス」への返歌のような実に洒落た解題を付す。

「リルケのレゾナンス」は、直接リルケを論ずることなく、自らのパリ生活を語ることと、リルケと響きあっていた。<sup>23)</sup>

まさに、「然り！」である。

ただし、わずか20数頁の短い文章の中で14回もリルケの名前が出てくる。が、それでも森有正はリルケを論じてはいない。森有正はリルケの詩はもとより、『フィレンツェだより』や『マルテの手記』のような散文の中にも、理性を超えたものがあることを見抜いていた。つまり、リルケにおいて散文は詩と同じ質感をもった「作品」である、と。筆者もまた、森有正に倣って、このあとすぐ、筆者の「リルケのレゾナンス」の中でこのことに言及してみたい。

作品ということ言えば、作家の辻邦生が森有正『バビロンの流れのほとりにて』を、「思想的な文学作品」と呼んでいる。森有正自身、以下のような不思議なことを口にしていて、

（……）けれども、この問題も質問に答えるという形では明らかにすることができません。なぜなら、私の本は手紙や日記の形式をとっていますが作品ですから。<sup>24)</sup>

作品だから質問に答えられないと言う。作品であるということはもうすでに創り手を離れて事象化し、さらに物象化（モノ化）していて、制作した本人でさえもはや自由が効かない、勝手に手をいれる訳にはいかないと言っているのだろうか。おそらく作品は制作者自身の「経験」の表象であり現れであるから、本人といえども論ずるとか説明するという訳にはいかないと言っているのだろう。その意味では、先の編集部のいう「論ずることなく、自らのパリ生活を語ること



で、リルケと響きあっていた」という評言はまことに正鵠<sup>せいこく</sup>を射ている。森有正が「作品だから質問には答えられない」というのは、その心の奥底にあるリルケの刻印がそう言わせるのである。

こうして私はリルケの刻印を受けた。<sup>25)</sup>

そこにはこういう簡単な説明があるのみである。

(……) 私の受けた衝撃は大きかった。モーリス・ベッツによる「フィレンツェ日記」の仏訳を、当時パリに留学しておられた二宮敬氏の御助力を受けて訳さないではいられないほどその衝撃は大きかった。それは私にとって一つの人間的世界の啓示のようなものだった。一つの人間的世界と言ったが、それでは不十分で私の意をよく表わしていない。一つの人間<sup>・</sup>的<sup>・</sup>歩<sup>・</sup>みと言った方がよいかも知れない。<sup>26)</sup>

ここでもまた人間<sup>・</sup>的<sup>・</sup>歩<sup>・</sup>み——「人間が人間になる」歩み——や「啓示」が出てくる。パリでリルケに出会って「文体」が変わったといわれるほど、リルケの衝撃は大きかった。このように、森有正の「リルケのレゾナンス」を作品として見ることによって、詩人リルケが鮮やかに浮かびあがってくる。この作品はまた、森有正によるリルケへの献辞<sup>オマージュ</sup>である。

それでも、森有正はリルケから一方的に学んだのではなく、レゾナンスという言葉が意味するように、森有正の内部にすでにあるもの、あったものと、リルケが共鳴し共振し交響し合って生成展開されたものである。

しかし先ほど見たように、森有正はこのことに関しては多くを語らない。そこで筆者はここに、森有正の「リルケのレゾナンス」にあたるとされるリルケの文章を幾つか摘記してみたい。たとえばリルケの、こういう感覚がその一つに当たるか。

いろいろの芸術の中の一つの芸術のそのまた一つ一つの作品の中には、《芸術》というもののすべての効果が実現されていなければならない。一枚の絵は、仲介を必要としない。一個の彫像は色彩——絵画の意味において——を必要としない。また一篇の詩は音楽を必要としない。正反対に、各々の中にすべてが含まれていなければならないのである。<sup>27)</sup>

上記引用文中、「一枚の絵は、仲介を必要としない」とあるが、リルケはほかの箇所でも、こう言う。

これらの作品<sup>・</sup>を十分に味わう方法を教えようとするイタリア案内書は、ただ一つの言葉、ただ一つの勧告だけを含むべきである。それは、見よ！ということである。<sup>28)</sup>

この「見よ！」は、リルケがこの数年後にパリに移り棲んで執筆した、そして最初期の森有正が手放さなかったという『マルテの手記』（1904年から1910年にかけて執筆される）の中の重要なモチーフとして再登場する。

僕はまずここで見ることから学んでゆくつもりだ。なんのせいかわからぬが、すべてのものが僕の心の底に深く沈んでゆく。ふだんそこが行詰りになるところで決して止らぬのだ。僕には僕の知らない奥底がある。すべてのものが、いまその知らない奥底へ流れ落ちてゆく。そこでどんなことが起るかは、僕にちっともわからない。<sup>29)</sup>

森有正がこれをどう読んだかは記されていない。が、「パリに触れた」ことを、森有正は次のように述べる。

前に述べたように、私は最初パリの南のへりに在る大学都市の日本館に6ヵ月いた。……。次はエッフェル塔の下、第7区のブルジョア街に間借りをした。それからカルティエ・ラタンの安ホテルに約7年間いた。そこで私は始めてパリに触れた。「パリに触れた」というのは、自分の心が自分の生まれた国の感覚から離れたということである。この後者は、後日更に深い次元で再発見されるものではあったが。<sup>30)</sup>

7年間棲んだその安ホテルの自室で翻訳した『フィレンツェ日記』の訳者は後記に、こういう添え書きを付している、

1956年7月1日、パリ第5区アベ・ド・レペ街4番地の一室にて 向い側、5番地に、リルケがかつて滞在したホテルの一室の窓をのぞみながら 訳者。<sup>31)</sup>

それにしても、「自分の心が自分の生まれた国の感覚から離れた」というのは只事ではない。「この後者は後日、更に深い次元で再発見されるものではあったが」とあるのは、次のくだりがその一つに当たるか。

地平のかなたに、手ごわい問題、まさに恐るべき問題が、姿を見せはじめた。今のところ、遥か遠くにではあるが、つまり、将来、僕は、自分を表現するために母国語を捨てざるをえなくなるのではあるまいか、ということである。このような恐れを感じるのはこれが初めてである……。<sup>32)</sup>

リルケに出会い、そしてパリに触れて《自分の心が自分の生まれた国の感覚から離れ》《言葉が破れた》森有正は、「いまその知らない奥底へ流れ落ちてゆく」リルケと、実に似通った相貌

を呈している。

「リールケのレゾナンス」にもどれば、リルケを読んでいると、こういう詩のような散文にしばしば遭遇する。さらに幾つか摘記してみる。これはむしろ、もはや筆者の「リルケのレゾナンス」と呼ぶべきかもしれない。

土の中に閉じ込められた根が、枝に花が咲いている時、それを知らないことは、大いにあり得ることである。<sup>33)</sup>

多義的に解釈できる不思議な言葉である。

まだ晴れきらぬ庭のところどころの銅像が灰色の霧の中で、薄い陽光を浴びていた。長い道に沿うた花園の花々が、ようやく目をさまして、一つ一つびっくりしたような声で《紅い》と叫んだ。<sup>34)</sup>

こういう表現に至っては、筆者はもはや頭をさげて通り過ぎるだけではすまない。さらに続けよう、

人々は生きるためにこの都会〔パリのこと——引用者補〕へ集まって来るらしい。しかし、僕はむしろ、ここではみんなが死んでゆくとしか思えないのだ。<sup>35)</sup>

筆者は理由は判然としないが、この箇所強く魅かれる。なお、森有正は珍しくこの個所に次のような注解を付している。

それは「ここへ来ればほかのどこへも行きたくなくなる」という意味であろう。それはもう一度言い換えなければならぬ。それは、人はこの町を生かしている感覚の密度に到達することがむづかしい、ということである。自分の感覚の質がいつもそれよりは疎雑に感ぜられるということである。<sup>36)</sup>

僕はしばらくして一人の妊婦に出会った。彼女は重たい足どりで高い日向<sup>ひなた</sup>の塀に沿って歩いていた。時々、手を延ばして塀をなでながら歩いた。塀がまだ続いているのを確かめでもするような手つきに見えた。そして、塀はどこまでも長く続いているのだ。僕は塀の中はなんだろうと、地図を出して搜してみた。それは市立産院だった。<sup>37)</sup>

これのどこが「死」か、ここには妊婦であれ市立産院であれ、新しいいのちが表象されている

だけではないかと訝しく思われるかもしれない。が、ここには生の裡に「先取りされた死」の翳<sup>かげ</sup>りが深く射し込んでいるように、筆者には感じられる。——妊婦、パリの産院、そして今日のこの「特別講義」には、父がいずれも産婦人科開業医である、二人の娘がいる。

筆者がこの一文のどこに死を感じるかといえば、「時々、手を延ばして塀をなでながら歩いた」という箇所である。

ここが筆者に突然、フランス・ベネディクト会「サン・ブノワ・シュール・ロワール修道院」を蘇らせ、響かせた。先ほど予告しておいた「サン・ブノワ・シュール・ロワール」である。38年前に小1か月間、滞在した、わけても、大聖堂地下の納骨堂で「九時課」(午後3時頃)に行<sup>きょう</sup>じられる聖務日課<sup>オ・フ・イス</sup>や「廻廊の翳り」を——。

文脈上の整合性を度外視して、当時、筆者が綴った拙文のごく一部を引いてみよう。

### 廻廊の翳<sup>かげ</sup>りの中で——フランス・ベネディクト会修道院の生活にふれて

ベネディクト修道会「花の大修院」(L' Abbaye de Fleury)、別名この地に因んで「ロワール河畔の聖ベネディクト修道院」(St.Benoit sur Loire)と呼ばれるこの修道院の1日は満天の星々の下の黙想ではじまります。

まだ明けやらぬ暗い石畳の廻廊を、黒い修道服に身を包んだ修道僧たちが小聖堂に急ぐさまや、聖堂内陣で終課のあと修院長から1人ひとり祝福を受け、大沈黙に入ったことを告げる頭巾を被り廻廊の暗闇に消えてゆく後姿のなかに、修道生活の密度の高い孤独を垣間見ました。孤独もまた、修行なくしては得られないことを、私は思いしらされました。

前夜からの大沈黙を破る、朝の第一声は、

♪ 主よ、わたしの口をお開きください  
わたしはあなたを賛美いたします ♪

と歌われる、美しい単旋律のグレゴリオ詠唱です。

ここでは自分の口を開くにも、主の力を借りなければならないようです。破られた沈黙はすぐさま、黙<sup>メディタシオン</sup>想のなかで修復されます。

昼下がり陽が少しかたむきかけた2時半、地下霊廟での第九時課(朝起きてから9時間目に当たるという意味でそう呼ばれる祈祷)で早くも死の準備にとりかかる。

先にも書きましたが、修道院はとても「死」に近い空間です。それは死の空間と言ってもいいと思います。この地下の納骨堂は修道院建築の中でもとりわけ、〈死〉を端的に表象する空間です。廻廊の翳りはここに発しているかもしれません。廻廊の翳りの中で、修道僧たちは祈り、読書し、そして時としてまどろむ。

そしてその翳りは、——向こうがわから与えられたものとしての〈光〉のなかで遊び戯れる。<sup>38)</sup>

実は、森有正はしばしば、この僧院、——サン・ブノワ・シュール・ロワール修道院に言及している。しばしばと書いたが、精確には全著作を通じて5回である。<sup>39)</sup>

筆者が同院を訪問した時には森有正がこの僧院に触れていたことを知らなかった。というのは、筆者の訪問は1979年9月であり、この日記が二宮正之によって翻訳されてはじめて公刊されたのは1981年12月であるので知る由もなかった。森有正との接点があんなところにあったとは偶然であり感慨深い。

森有正のこの僧院への5回の言及の内、ここでは一か所だけ引いておこう。

中世初期の厚い闇は、深く隠されたこの神秘を内包している。サン・ブノワ・シュール・ロワールは象徴以上のものだ。それはヴェールに包まれた現実なのである。そしてその前景では生活が続いて行く。<sup>40)</sup>

先に引いた、

《決定的》になった生を自由に生きること……。 (……) このように考えると、わたくしは、修道士たちが自らの《過去》を絶えず生きているサン・ブノワ・シュール・ロワールに想いを馳せずにはいられない。<sup>41)</sup>

と合わせて読むと、実に不思議な言句である。詩句であると言ってもよい。

こういうことを指してか、森有正を称して「神秘主義者」とか「象徴主義」という人がいる。<sup>42)</sup>

それもこれもゆえなし、とはしない。

リルケからやや脱線したが、ここでもまた森有正の引用の不思議な内容を含めて釈義はしないで先を急ごう。

今はもう誰一人知るべもない故郷のことを思い出すと、僕は昔はそうでなかったと思うのだ。昔は誰でも、果肉の中に核があるように、人間はみな死が自分の体の中に宿っているのを知っていた。(いや、ほのかに感じていただけたかも知れぬ。) 子供には小さな子供の死、大人には大きな大人の死。婦人たちはお腹の中にそれを持っていたし、男たちは隆起した胸の中にそれを入れていた。とにかく「死」をみんなが持っていたのだ。それが彼らに不思議な威厳と静かな誇りを与えていた。<sup>43)</sup>

ここも、リルケの詩のような散文、美しい抒情が描写される箇所のひとつである。

また、森有正の経験思想の中核部には「死」の胚珠が宿っているが、これもここでは指摘だけに止めざるをえない。

僕は直接僕の見た人々や噂にきいた人々のことを思い出したが、みんなこの祖父と同じであつた。彼らはいずれも自分だけの「死」を持っていた。男たちは甲冑かっちゅうの中に深く「死」を入れていた。死はとらわれ人のように見えた。婦人たちは老年になるにつれて体まで小さくなったが、大きな寝床の上で、芝居の舞台のように、家族や召使や犬たちを呼び集めて、しとやかに、主人らしく、息をひきとった。子供たちも、いとけない幼な子すら、ありあわせの「子供の死」を死んだのではなかった。心を必死に張りつめて——すでに成長してきた自分とこれから成長するはずだった自分を合わせたような幽邃ゆうすいな「死」をとげたのだ。<sup>44)</sup>

小さな『マルテの手記』を、リルケは8年かけて書き、9年かけて読み込んだ森有正はこの箇所で深く付んだことであろう。森有正は戦争中、長野の疎開先で、3歳の稚い長女を病で死なせている。その幽邃な、奥の深い静かな死の情景や、後に夢の中で甦って再会する娘のことを日記に綴っている。

ここはあえて引用しないでおく。関心のある方は「流れのほとりにて」(『バビロンの流れのほとりにて』前掲書、1968年版、152-153頁)を当たってみたい。

「……」

リルケは上記の引用のすぐ後に、

産み月間近になった婦人のじっと立っている姿には、なんという悲しい美しさが翳かげっていることだろう。ただ無意識にそっと細い手をのせている彼女のお腹の中には、子供と死と、二つの胚珠はいしゅがはいっているのだ。彼女の清らかな顔に、濃い、しっとりした微笑が流れるのは、ときどき、この二つのものが育つのを自覚するほのかな安堵あんどからの微笑ではあるまいか？<sup>45)</sup>

詩人でなければ、「悲しい美しさが翳かげっている」とは書けないであろう。さしずめ筆者などが書けば「悲しい美しさが漂っていることだろう」と書くのがせいぜいである。さらに、

「子供と死と、二つの胚珠はいしゅがはいっているのだ」も……。

詩人リルケは、森有正が指摘するように、散文でも絵を描くように音を奏でるように、言葉で「感覚の組織化」を証示して見せてくれる。森有正がリルケから学んだという、「ことばを使って感覚の組織する」「感覚の組織化(オーガニゼーション)」「感覚のひずみ」とは、リルケのこうした言葉たちのことを指しているのであろうか。

以上、リルケの描く「死」の象たち<sup>かたち</sup>を見てきたが、上で触れたとおり、リルケの『マルテの手記』はその冒頭8頁から23頁まで死一色で彩られている、——「リルケの感覚の病的なまでの尖鋭化、その内省の異常な深まり、その徹底的エゴイズム」(森有正『バビロンの流れのほとりにて』前掲書1968年版、96頁)。死など縁起でもない話だと思うかどうかは受け取り手の個々人にゆだねられている。が、筆者はといえば、人間存在の「生きて在る」、その根底(ここでいう「人間的基礎」)には、孤独があり死があり、絶望があると考えている。むろん夢や希望、喜びや切なる願いがあり、それら丸ごとが人間である。「僕には僕の知らない奥底がある」(『マルテの手記』10頁)という、その人間の奥底に測鉛をおろさないかぎり、固有の生も固有の死も、つまり人間存在の《固有—普遍》の深みや高みには至ることができないのではないだろうか。

この死は生に反転・転化する逆説的<sup>パラドキシカル</sup>なものである。

森有正の表象する死には、二宮正之が描くような瑞々しい生がそっと添えられている。

彼の作品を構成している題材の豊かさは、驚くべきものである。そこには、パリのノートル・ダム寺院のカテドラルがある。シャルトルの、そしてコルドバのカテドラルがある。ギリシャの廃墟がある。夕食に注文した料理がある。バッハの音楽とオルガンの演奏とがある。若い女性のかすれた魅惑的な声がある。店先に並べられた魚の色つやがある……。そして、これらの題材が、すべて、「いかに生きるか」という中心問題に結びついているのである。具象的な世界との接触の脇には、生について、死について、絶望について、希望について、愛について、個人について、社会について、そしてまた神性について、生きた深い思索がくりひろげられる。<sup>46)</sup>

そしてその裏面には「いかに死ぬか」——森有正は「人間が人間になって」初めて安心して死ぬことができると言わんばかりに——という命題がピンで止められていると、筆者には思われる。

ここでの最後の引用としてリルケの次の一文を掲げておく。

詩は人の考えるように感情ではない。(……) 詩はほんとうは経験なのだ。一行の詩のためには、あまたの都市、あまたの人々、あまたの書物を見なければならぬ。あまたの禽獣を知らねばならぬ。空飛ぶ鳥の翼を感じなければならぬし、朝開く小さな草花のうなだれた差<sup>はじ</sup>らいを究めねばならぬ。まだ知らぬ国々の道。思いがけぬ邂逅<sup>かいこう</sup>。遠くから近づいて来るのが見える別離。——まだその意味がつかめずに残されている少年の日の思い出。喜びをわざわざもたらしてくれたのに、それがよくわからぬため、むごく心を悲しませてしまった両親のこと(ほかの子供だったら、きっと夢中にそれを喜んだに違いないのだ)。さまざまの深い重大な変化をもって不思議な発作を見せる少年時代の病氣。静かなしんとした部屋で過した



一日、海べりの朝、海そのものの姿、あすこの海、ここの海、空にきらめく星くずとともに  
 はかなく消え去った旅寝の夜々、それらに詩人は思いめぐらすことができなければならぬ、  
 いや、ただすべてを思い出すだけなら、実はまだなんでもないのだ、一夜一夜が、少しも前  
 の夜に似ぬ夜毎ごとの闇の営み、産婦の叫び、白衣の中にぐったりと眠りに落ちて、ひたす  
 ら肉体の回復を待つ産後の女、詩人はそれを思い出に持たねばならぬ、死んでいく人々の枕  
 もとに付いていなければならぬし、開け放した窓が風にかたことと鳴る部屋で死人のお通夜  
 もしなければならぬ、しかも、こうした追憶をもつだけなら、一向なんの足しにもならぬの  
 だ、追憶が多くなれば、次にそれを忘却することができねばならぬだろう、そして、再び思  
 い出が帰るのを待つ大きな忍耐がいるのだ、思い出だけならなんの足しにもなりはせぬ、追  
 憶が僕らの血となり、目となり、表情となり、名まえのわからぬものとなり、もはや僕ら自  
 身と区別することができなくなって、初めてふとした偶然に、一編の詩の最初の言葉は、そ  
 れら思い出の真ん中に思い出の陰からぽっかり生まれて来るのだ。<sup>47)</sup>

いいことを教えてもらった、ここは作詩上の技法ではむろんなく、詩人リルケの魂を垣間見せ  
 てもらった、いや、リルケの魂に触れさせてもらった、

森有正はここを読んでどんな感慨をもったか、

ここではリルケは「詩は人の考えるように感情ではない、詩はほんとは経験なのだ」と言っ  
 ているが、こう置き換えてもよい筈だ、「詩は人の考えるように言葉ではない、詩はほんとうは経  
 験なのだ」と、

詩人リルケの以上のような言葉たちを浴びたら、よほど鈍い人でなければ、森有正のようにな  
 るかどうかは別にしても、ただ事ではすまない、

### 3-4 こゝとばが破れる

パリで森有正の身の上に起こったことは、つきつめて言えば、《こゝとばが破れる》ことだっ  
 と、筆者はみている、森有正は以下のように、精確には、——「自己がこゝとばで受けとっていた  
 世界が破れる」ことだったと言っている、が、意味は変わらない、

それは換言するならば、自己がこゝとばで受けとっていた世界が破れてその下から、感覚に  
 よって確かめられた世界が現われて来てそれにとって代ることであり、幼児期の歯が脱け落  
 ちて丈夫な大人の歯に代られるのと同じことであり、それは単に世界の像が変化するだけで  
 はなく、ものを摂取する仕方そのものが変化して来るのである、感覚の底に在る意志が露わ  
 れ始める、感覚そのものが強靱さをもって来る、新しいペルクス・ペクティーフが開け始め  
 る、この強靱さそのものと、それが生まれてくる過程は今一つ一つ説明していることは出来  
 ない、とにかく感覚は一つの新しい平衡の時期に入る、(……)

それ〔ヨーロッパと日本との間の拡大する距離の実体——引用者補〕は、感覚がすでに述べたように、意志によって透過されているということ、更に換言すれば、感覚そのものが、自己を純化する軸のように批判を含んでいるということの有無である。この軸の批判を含むが故の強靱さこそ、この距離感の中枢をなすものであり、リールケが「マルテの手記」の終末の方で述べているあの「無関心」と同質のものである。私はそこにヨーロッパの精神とその質との集中的な表現の一面を見るように思うのである。それは孤独、あるいは自我の主体性を生きること（概念的に観念するだけではなく）と言ってみても同じことである。私は、そういう感覚が純化し、自己批判を繰り返しつつ堆積し、そこに自己のかたちが露われて来るのを「経験」と呼び、単なる感覚の集積である「体験」と厳密に区別している。ヨーロッパでは「体験」は「経験」へと純化される傾向をもち、日本では「経験」は「体験」に変質する傾向をもつ、とも言えるかもしれない。<sup>48)</sup>

「ことばが破れる」にせよ「心が生まれた国の感覚から離れる」にせよ、そして「自分を表現するために母国語を捨てざるをえなくなる」にせよ、いずれも自我にとっては尋常ならざる事態、自我の崩壊の危機だ。が、森有正のおもしろいところは、いや精神の強靱なところは、次のように語る点にある。

（……）私自身としては、その崩壊ととられる時期を、かえって逆に、自分の主観性・人格性の高揚期として意識するのです。たしかに、私は崩壊しつつあったのかもしれない。そういう蓋然性は多い。しかし私自身には、自分が崩壊しつつあるという意識はほとんどありませんでした。<sup>49)</sup>

またこうも言っている。

しかし私には、どんなに破壊しても自分は破壊されつくせないという強い確信があります。ですから、自分を安全に保とうということに心配する必要はありません。<sup>50)</sup>

そして何よりも森有正がすぐれているのは、たんに「ことばが破れる」だけではなく、以下にみるように、同時に「感覚」によって確かめられた世界——あるものとの直接の接触（「巴里私記」397頁）——が立ち現われてくるという点である。これが森有正の最も大切な「経験」への端緒である。

ここで注目すべきは、「ことばが破れる」ことはもとより、それ以上に「その下から、感覚によって確かめられた世界が現われて来てそれにとって代ること」「感覚の底に在る意志が露われ始める」ということと、「感覚そのものが強靱さをもって来る」ということ、さらに「感覚が意志によって透過されているということ」「感覚そのものが、自己を純化する軸のように批判を含

んでいるということ」等々である。

そしてこの批判は、例の《自己批判》であり感覚の純化として示される、感覚から経験へ、さらに思想へと生成深化させる重要なモメントである。ここからもまた、経験から思想への道筋が立ちあがってくる。

ただし、「感覚の底に在る意志が露われ始める」という当の意志については後に、複雑微妙な言い方がこれに加わる。

意志というが、それを言って滑稽にならないためには、どれほどの遠い距離を歩き尽くさなねばならぬことか。(……) ここでもまた、この《神秘の》道が真に人間的な唯一の道なのである。それによって凡てが耀き出し、存在する一点、ところがそこへの接近を許すのは、神秘主義的な信仰なのであり、しかもそれには大変な冒険をおかさなければならないのだ。いや、それはペルスペクティーヴが変わるということではない。それは《生きる》者の総体的な変貌なのである。<sup>51)</sup>

ここに登場する「冒険」は例のアヴァンチュールのことである。そして「信仰」がここに顔をだすが、一筋縄ではゆかない大問題である。先に短く触れたが、これもまた、最後のところに回す以外に術はないと、筆者は考えている。さらに「変貌」は1967年に初めて登場する《経験》の動態的な位相を強調する、森有正にとってはきわめて重要な概念である。<sup>52)</sup>

そしてこの続きとして、先ほど引用した「地平のかなたに、手ごわい問題、まさに恐るべき問題が、姿を見せはじめた。……」が続く。

理知的にも感覚的にも高い資質を有する森有正は、言葉が破れて感覚と向き合うことになる。あの「えたいの知れぬ願えんげんい」を淵源として、ことばが破れ、そして心が「自分の生まれた国の感覚から離れ」たら、もはや厄介のレベルを遥かに超えている。これらの事態こそ、森有正の生き方を変えた根本因であるとみても差し支えないのではなかろうか。

このことは哲学者にとっても、幸か不幸かわからない。が、ここに辿り着くのであれば、あの洋上での「えたいの知れぬ願えんげんい」に、自らの意志で身を任せて突き進んで行って、ことばが破れても、心が生まれた国の感覚から離れても、当の本人は後悔することはなかったであろう。そして「えたいの知れぬ願えんげんい」に素直に身を委ねることこそ自身の経験思想の中枢である《感覚—経験—思想》の結晶化、そして「人間が人間になる」ということへの道に繋がったのだから——。

さらに森有正はこう言及する、

物でも相手の人間でも、すべては自分が勝手につくり出したものではないので、与えられたものであるというところに、「感覚」とか「経験」とか「思想」とかいうものの正しさの根本的な性格があるのです。<sup>53)</sup>

「与えられたものである」ということは例の「啓示」「内なる促し」「刻印」に共通する基本的な性格であろう。「物でも相手の人間でも」とあるが、物に注視するか人間に注視するかでは森有正の「経験」の位相が大きく変わってくる可能性がある。滞仏前期から中期（すなわち毎年日本に帰って来るようになる1966年頃までは）、自己の内側に沈潜して「感覚」が研ぎ澄まされて行った。そしてその後、人間への注視に比重が傾くと、自己の外部である「社会」（とりわけ日本の社会とか文化のあり方）への発言が多くなる。

この点は、海老坂武の次の文が参考になる。

（……、）私は次のことにも注目をする。〈経験〉はそれまで、我とものとの関係の上に成立する〈感覚〉を基礎にしていた。しかしいまや、我と人びととの関係の上に成立する〈生活〉の上に軸を移そうとしている。あたかも〈生活〉という視点を導入することによって、〈経験〉概念を拡大しようとしているかのごとくなのだ。あたかも〈経験〉を〈生活〉の中に埋めこむことによって、〈社会〉を語る視点を模索しているかのごとくなのだ。<sup>54)</sup>

海老坂武のこの指摘はきわめて示唆に富んでいる。が、筆者はこの「社会」の先に、というか奥に、もう一つ「信仰」の問題を措定してみたい。先にも少し触れたように、晩年に差し掛かった森有正は「信仰」のことに言及することが多くなった。この信仰の問題は死の問題（罪の問題）とも密接に繋がっている。1969年、パリ大学の授業中に発作を起こし座っていた椅子から転がり落ちている。また翌年8月には北海道大学に滞在中、体調を崩し二週間の入院を余儀なくされている。森有正は自分の人生の「終わりの始まり」を強く意識するようになる。このことと関連するかどうかは断定できないが、ほぼ同じ時期の「日記」に次のように記している。

僕の生はそれ自体の成熟に向って時を刻んでいるのだから、他人に触れさせてはならない。今までに生じた断絶は凡てそこから来ているのである。東大を辞職したこと、結婚に二度までも失敗したこと、出版社の人との軋轢、凡てはそれに由来するのである。それはだから僕の独立性と力との証しなのだ。僕は愛と信仰しか必要としない。このような根源的な認識に達した僕はこの上なく調子がよい。この精神の健康を維持しなければならない。<sup>55)</sup>

森有正がキリスト教信仰を持っていることは周知の事実ではあるが、こういう風に明言することは晩年近くになって多くなる。この日記も死の7年半前である。さらに「死と信仰」についてみると、次の二つのことが重要であると、筆者には思われる。

その一つは、遠藤周作に触れて、こう記す。

私は、遠藤周作さんとテレビでか雑誌でか対談することになっているので、少し遠藤さんのものを読んでいたのですけれども、ある対談の中で遠藤さんに、相手の武田泰淳さんが、「あなたは信仰を持っているか」というようなことを聞いたわけです。すると遠藤さんが、「私は自分が本当に信仰を持っているかどうか、死ぬ前にそれを決めて死ぬつもりだ」とこう言われたのです。私はその言葉に非常に感動したのです。すなわちそこに死という問題が入ってきている。遠藤さん自身が、どんなにその問題に苦しんでいるか、それを感じました。

私はそれだけ皆さんに申し上げたいのです。<sup>56)</sup>

今一つは、以下の「日記」である。

26年間、パリで堆積した経験が一せいに目ざめ、朝湊して来るように感ぜられる。

引っこしの荷物の間に J. B. グレール師の「ヘブライ語学習者の手引き」(1861年版, A. ジュビー出版)がころがっていた。それは偶然とはどうしても思われなかった。これから始めなければならないのだ。原石塊は世界一良質なのだ。一切の思いつき、虚栄、欲望、流行を完全に無視してしまわなければならないのだ。「聖書共同研究」の「創世記」のアブラハムの項を読んでみた(日本キリスト教団出版局発行)。材料が良すぎてかすりきずも附いていない。それは当然のことだ。

私はもう64歳をこえた。もうこの素材にとり組まなければならない。

Rue du Temple と Avenue de Paris の角に改革教会を見つけた。日曜毎に行くことにする。日曜朝10時半に礼拝式がある。アブラハムの慇懃と敬虔と自由と寛宏とをもって生きようと思う。

そしてそれは私の最後の日まで続くであろう。<sup>57)</sup>

この日の日記が日記としては絶筆である。おそらく、日記だけでなく、これがほんとうの絶筆であろう。森有正はこの一週間後に友人二人とパリ郊外の自宅近くの中華飯店で昼食をとった後、急に体調が悪くなり、パリ市内の病院に担ぎ込まれて、その二カ月後に入院先で死去する。——「死と信仰」。

森有正の経験思想の根底には「死と信仰」がある。先にも指摘したように、このことを、海老坂武のいう「社会」に、もう一つ「死と信仰」をつけ加えなければならないと、筆者は考えている。

話は変わるが、筆者はこの小品とともに、「巴里私記——ひとつの思想の誕生——」が大好きである。これは死後、パリの書斎の<sup>はこそこ</sup>筐底ふかく秘められてあった未完で未定稿の作品である。副題に「ひとつの思想の誕生」とある点にも注目しておきたい。この時期、1970年前後、着手さ

れている未完の「経験と思想」とあわせて、完成されていれば森有正の金字塔のような作品になったと思われる。思い入れもそれだけに強かったことが当時の日記からも伺える。

今日、サン・ジェルマン・デ・プレのキャフェで「巴里私記」*Cogitationes privatae*を見なおした。かなり早く、例えば一月上旬ぐらいまでに終えられるだろうか。<sup>58)</sup>

森有正はこれもまた、岩波書店からの出版を考えていたようである。その「序に代えて」の冒頭にこう書かれている。

これから書こうとしているのは、パリ、ないしフランス、の紹介ではない。私は、1950年初秋、フランスへ渡り、爾来、満26年間、パリで暮らした。その期間の単なる思い出を綴ろうとするのでもない。そうではなくて、東京に生れ、そこで育ち、そこで教養を受けた私が、パリへ移り、一つの別の文明に接触した、その接触と、それが私の中に生み出したもの（経験）と、そして最後にそれらに就いてのささやかな反省と思索（反省や思索は経験そのものではない）と、そういうものを書こうと思う。<sup>59)</sup>

さらに「接触」についてこう付け加える、

パリに赴いたことが私に対してもつ意味は、第一には「接触」という言葉で要約することができる。それは観察とか認識とかいう以前の、「接触」という言葉でしか表すことの出来ない直接的、感覚的なできごとであった。<sup>60)</sup>

「共鳴」にせよ「接触」にせよ、観察とか認識とかいう以前の、いずれも五感（官）が深くかわっている。森有正はふつうの学者と違って言葉や観念から出発していない。

突拍子もないことを言うようであるが、確かに森有正は一つの迷宮（ヴェールに被われた迷宮）であり、そこには迷路が張りめぐらされている。が、思想家であれば大なり小なりそういう面がなくはないように思われる。森有正がいう「レゾナンス」にしても、ここには言葉の世界、観念（概念や命題）から出発しないという固い決意や覚悟の発露がみられる。判り難さのゆえンである。

それでも時間をかけて何回も何回も丁寧に読み込んでゆけばヴェールに被われた迷宮は姿を露にしてきて謎がとけ、大きくみれば辻褄が合うようにできている。

『森有正の日記』の作者である作家、佐古純一郎はその書の「あとがき」にこう記す。

森有正先生の滞仏日記を対象とするこの小さな書物は、私自身が会員として所属している基督教共助会が発行している月刊誌『共助』に1982年8月号から1986年1月号にわたって

30 回の連載として発表したものをまとめたものである。(……)

毎回必ず一度は日記を読みかえすということ、それが私が自ら規定したルールであった。それゆえに少なくとも私は森有正先生の日記を 30 回は読んだことになる。<sup>61)</sup>

全体で 1,200 頁を超える日記を 30 回読んだという、驚くべき話である。上には上がある。

では、われわれは何処から出発すればよいのだろうか。

その示唆は、リルケや高田博厚や、そして当の森有正がそうしたように「感覚」から出発するほかないように、筆者にも思われる。

感覚から出発すると言っても、容易な話ではない。今日では観念で覆い固められてしまった感覚の、観念からの解放、感覚の浄化、純粹化が大仕事であり、その消尽に全生涯を使う人もいる、と森有正はどこかで書いている。容易ならざることであると、釘をさしている。

リルケの場合の感覚は「見る」である。先ほど言及したように、リルケは、「詩はほんとうは経験なのだ」(『マルテの手記』27 頁)。リルケの詩句の最初の一文字、一行は観念でつくられていないことはもとより、言葉でつくられていない可能性だってある。

### 3-5 薔薇、おお！

以下に、西田幾多郎の流れをくむ哲学者、上田閑照によるリルケの墓碑銘(遺偈)<sup>ゆいげ</sup>である薔薇の詩の解釈を見てみよう。上田閑照は「根源語」という自らの仮説概念を次のように説明する。

(……) 根源語というのは、さしあたって純粹経験という出来事を理解するための一つの仮説的な術語と考えていただければよいと思います。何か根源語というものがあるという意味ではありません。純粹経験という出来事を言葉の問題に照らして理解するための一つの仮説的な術語です。<sup>62)</sup>

そしてその上で、リルケの詩に以下のような実に興味深い解釈をほどこしている。

|                              |                                       |
|------------------------------|---------------------------------------|
| 薔薇、おお！ 純粹な矛盾                 | ROSE, oh reiner Widerspruch, Lust     |
| 幾重にも重ねた臉の下                   | Niemandes Schlaf zu sein unter soviel |
| 誰のでもない眠りである悦 <sup>よろこび</sup> | Lidern                                |

この詩の全体は、(i)「薔薇」、(ii)「おお！」、(iii)(a)「純粹な矛盾」、(b)「幾重にも重ねた臉の下 誰のでもない眠りである悦」、の三つの部分に一応分けて見ることができるであろう。(i)は薔薇の現前、(ii)の「おお！」は、薔薇の現前に打たれた「驚き」がそのまま言葉以前の音声となって発せられたもの、(iii)はその「驚き」が言葉になって詩句に開かれたもの



である。ところで、出来上がった詩としてではなく、このような詩句が生れてくる「言葉の出来事」として見る場合、(ii)の「おお！」を詩句の全体が発せられてくる源——根源語(Urwort)——と見る、逆に言えば全詩句をこの「おお！」の分節と見るができると思う。その時、この「おお！」とは何か。詩句の上に文字としてのこされた「おお！」ではなく、「おお！」と発せられるその出来事はその現成においてどういう出来事であろうか。「薔薇、おお！」と言う時、それは単に薔薇に対する驚きではない。薔薇の現前にあって自己を忘れて「おお！」と言う時、その「おお！」の直下においては薔薇も忘れられている。すなわちその「おお！」に現前しているものはもはや旧套の薔薇ではない。われわれが通常薔薇と呼んですませているそのものが、名づけえざるもの、言いえざるものとなって現前しているのである。その驚きなのであって、単に薔薇に対する驚きなのではない。

「おお！」は文法的には一つの品詞(感嘆詞ないし間投詞)として言葉の体系中に含めて整理されるが、感嘆詞が発せられる現場での出来事としてはむしろ言葉が一切奪われたその表現にほかならない。真に驚くことと言葉が奪われることとは一つの事である。言葉の体系は世界の見取図であって、世界との出会いは通常、言葉の枠組の内で行われ、言葉によってすでに整理されつつ経験される。その意味では通常われわれの世界は同時に言葉世界である。言葉にし得る限りではすでにわれわれの世界の内であり、そこには本当の驚きははない。結局はもち合わせの言葉通りの現実だからである。薔薇は薔薇であり、鳥飛ぶは鳥飛ぶだからである。「薔薇、おお！」と言う時しかし、薔薇はその「おお！」において薔薇ならざるものになって現前している。むしろ薔薇が「おお！」になったと言っていい。「おお！」は名づけえざるものの現前の響きであり、その現前によって人間から言葉が奪われる音である。薔薇と呼んですませていたそのものが突然名づけえず言いえざるものとなることによって、そこが裂け目になって言葉の世界が破れるその音響である。あるいは、言葉の世界が一挙に沈黙へと消されるその消失の音である。(……)人間が言葉を失って「おお！」になってしまったと言いうる。薔薇が名づけえざるものとなって、そこから言葉の世界が破れるその「おお！」において、同時に、人間もその「おお！」として自己に死ぬのである。「薔薇、おお！」と言う時、薔薇も「おお！」、人間もその「おお！」、天地ただ「おお！」のみである。<sup>63)</sup>

「薔薇、おお！」の《おお！》が発せられた後、「言葉の世界が破れ」とあるが、これは言うまでもなく、先ほどみた森有正の「言葉が破れて」(自己がことばで受けとっていた世界が破れる)と同一義である。

ところで、ことばが破れるとは、どういう事態であろうか。上田閑照はこういうふうにも言い換えている、

すなわち「おお！」は、上に述べたように言葉が奪われ言葉の世界が破れる音響であると同時に、言葉を奪って現前しているものが言葉になる最初の音声である。言葉を失ったとこ

ろから言葉がはじめて発せられるその出来事の始動の原音であり、且つ、そこで発せられる言葉ならざる原始の言葉 (un- wortliches Urwort)、言葉以前の言葉である。それはまだ言葉ではないが、いわば「言葉への言葉」であり、それによって言葉以前から言葉への道が開かれるのである。そのようなものとして「おお！」は「言葉から出て、言葉に出る」その極限的転換運動とすることができる。そしてそれは同時に、「おお！」と言葉を奪われて沈黙へと絶息した人間がその同じ「おお！」として言葉へと息をふきかえすことである。自己に死んで「自己ならぬ自己」へと蘇生せしめられる誕生の声である。「おお！」と言う時、そこには、人間の絶後再蘇がある。<sup>64)</sup>

仔細に見てみると実に興味深い箇所であるが、そしてこれだけ長く引いた以上、筆者のコメントが求められているようにも思うが、ここで筆者がこの一文に、一言半句たりとも加えたり引いたりすることはない。理由は、上田閑照のこの一文はこの詩への解題であると同時に、詩人リルケへの遺徳を讃える頌献辞であるから、そして何よりもこれ自身がひとつの密度の高い「作品」であるからだ。こういう場合、釈義は無用である。興味のある人はぜひ、当該箇所の前後を読んでみられたい。

ここでもう一度森有正に戻ると、渡仏して2、3年後（1952、3年頃）、森有正はパリでリルケに触れて、

「リールケ、おお！ 純粹な経験」

と感嘆の声を発したか。

そして上田閑照が言うところの、「おお！」、——その「驚き」が言葉になって詩句に開かれた。その詩句こそ、森有正の場合、リールケのレゾナンス——「リールケに就いては、そのレゾナンス（私の内部の共鳴）を語ることしか私にはできない」——であり、否それに遙かに先行する『バビロンの流れのほとりにて』や『流れのほとりにて』に始まる一連の作品たちに外ならない。

森有正は「おお！」と発して、「言葉が奪われ」「言葉が破れ」「言葉を失って」、そしてもう一度新たな言葉へと息をふきかえし甦る。<sup>よみがえ</sup>

（未完、次号に続く）

注

- 1) 現・十文字学園女子大学人間生活学部人間福祉学科非常勤講師。前・日本福祉大学大学院国際社会開発研究科非常勤講師（～2017.3）。前・明治大学大学院文学研究科臨床人間学専攻臨床社会学専修兼任講師（～2016.3）。前・立教大学コミュニティ福祉学部コミュニティ政策学科教授（～2011.3）。
- 2) 岡田 徹「福祉と開発の人間の基礎——私の《国際福祉開発論》にふれて」日本福祉大学大学院「公開講義」2014年12月13日（土）【東京会場／日本青年館】（未発表「講義録」）。  
岡田 徹「福祉と開発の人間の基礎——魂を透過した《美・悲・愛》たちへの旅——」『明治大学心理社会学研究』第11号、91-112、2016年3月26日。
- 3) 「流れのほとりにて」『バビロンの流れのほとりにて』所収、217頁、筑摩書房、1968年6月10日刊。  
「1957年8月19日（日）パリ」という添え書きのある日録体のエッセー。なお、この一文は、1957年7月に訪れた2度目のロンドン、ブリティッシュ・ミュージアムのギリシャ「パルテノンのフリーズ」や「老ソフォクレスの肖像」を見た後、やがて間もなく出かけるギリシャへの初めての旅を直前に控えた中で書かれたものである。
- 4) 「カルティエ・ラタンの周辺にて」『旅の空の下で』所収、190頁、筑摩書房、1969年8月30日刊。  
初出は1962年2月号『世界』岩波書店。
- 5) 「社会開発の人間の基礎（1）——現地NGO「パブリ」の講義から——」『立教大学コミュニティ福祉学部紀要』第12号、2010年3月。および「社会開発の人間の基礎（2）——バングラデシュ、そのむきだしの魂の〈美〉たちへ」同上誌、第13号、157-179頁、2011年3月。
- 6) 岡田 徹他編『コミュニティ福祉学入門——地球的見地に立った人間福祉』終章、246-261頁、有斐閣、2005年3月30日。
- 7) 森有正「巴里私記」『森有正全集』（第4巻）所収、382-383頁、傍点はすべて著者。なお、文頭の「今から26年前、……」とあるのは誤記であると、編集部は糾す。  
ラ・マルセイエーズ号の船上でのこの出来事は、1953年12月25日（ロンドン市西郊にて）という添え書きのある文章では、次のように記されている。

巨船の船尾の甲板の上のフォートゥイユに腰をおろして、海とその上に泡だつ船のすぎたあとを見ている僕は、自分がそこを再びもとに戻ることにはないような気がしてならなかった。……シンガポールやコロomboの港、それにもまして東アフリカのジブチは、その強い光と青い海は、僕の心をひいた。それは今から思うと決してエキゾティズムなどではなく、自分を新しい感覚に触れさせて、今あるものを破壊して先へ進もうとする意志、凶暴な意欲の表われであったのだ。（『バビロンの流れのほとりにて』前掲書、52-3頁）

二つの文章の間には微妙なニュアンスの違いが伺えて興味深い。ここに引いた文章では《感覚》にかんしても、「自分を新しい感覚に触れさせて」とあるように具体的で判りやすい。そして「凶暴な意欲の表われ」は「えたいの知れぬ願い」よりははるかに生々しく、パリに棲みはじめた初期の森有正の苦難が先取りされているような消息がよく伝わってくる。さらに言えば、「意志」と「感覚（サンサション）」や啓示の関係が微妙に変化している。そこにも森有正の思索の歳月を感じさせる。

なお、この出来事を記したもう一つの文章が存在する。（「アリアンヌへの手紙 書簡13、1969年5月19日〈月〉」『森有正全集』第14巻所収、570-1）。

- 8) 森有正「アリアンヌへの手紙」『森有正全集』（第14巻）、571-572頁。
- 9) 同上書、570頁、1969年5月19日〈月〉、東洋研究所、パリ8区、アヴェニュー・デュ・プレジダン・ウィルソン、22番地。
- 10) 「巴里私記」『森有正全集』（第4巻）、395-396頁、傍点、引用者。
- 11) 森有正「冒険と方向」『古いものと新しいもの——森有正講演集——』所収、166頁。日本基督教団出版局、1975年3月20日刊。

- 12) 上掲書, 174-175 頁.
- 13) 同上書, 「あとがき」, 239 頁.
- 14) 初出, リルケ (森有正訳)『フィレンツェだより』付録, 165 頁, 筑摩書房, 1970 年 9 月 20 日刊. その後, 森有正「リルケのレゾナンス」『森有正全集』(第 4 巻)所収, 249 頁, 筑摩書房, 1978 年 12 月 25 日, に収録される.
- 15) 「バビロンの流れのほとりにて」『森有正全集』(第 1 巻) 3-5 頁, 1978 年 6 月 28 日刊. 『バビロンの流れのほとりにて』(筑摩書房版) 3 頁, 1968 年 6 月 10 日刊. 初出は, 『バビロンの流れのほとりにて』1957 年, 「パリにて 1953 年 10 月 8 日」という欄筆の付記がある.
- 16) 高田博厚「『自我』を思索の中に生かす」『書評再録』『遙かなノートル・ダム』森有正をめぐるノート 4 『森有正全集』(第 3 巻), 19 頁, 第 4 回配本, 付録. 初出「週刊読書人」1967 年 6 月 12 日.
- 17) 森有正『デカルトとパスカル』5 頁, 筑摩書房, 1971 年 6 月 20 日刊. 初出は 1947 年 (昭和 22 年) 3 月発行「哲学」(思索社刊) 春季号 (創刊号) に, 「デカルトの方法的懷疑」と題して発表された. (『森有正全集』第 9 巻解題, 496 頁より)
- 18) 注 12) と同じ. 「バビロンの流れのほとりにて」『森有正全集』(第 1 巻) 所収, 3-5 頁.
- 19) 中村雄二郎「森有正氏とデカルト・パスカル——『バビロンの流れのほとりにて』まで——」森有正『デカルトとパスカル』所収, 筑摩書房, 514~515 頁, 1971 年 6 月 20 日刊.
- 20) 辻邦生『森有正——感覚のめざすもの』47 頁, 筑摩書房, 1980 年 12 月 10 日刊. 初出は「感覚のめざすもの——森有正論の試み」「思想」1971 年 5 月, 岩波書店.
- 21) 「リールケのレゾナンス」『森有正全集』(第 4 巻) 所収, 241 頁, 1978 年 12 月 25 日刊.  
なお, 本稿ではリルケの表記が「リルケ」と「リールケ」が混用されている. 森有正は 1957 年に『フィレンツェ日記』を刊行した際に「リールケ」を用いているが, 1970 年の再版では「リルケ」に変更している. 一般的な語用法は「リルケ」であるが, ここではあえて統一を図ることはしなかった.
- 22) 「リールケのレゾナンス」同上書, 241 頁. 初出, リールケ (森有正訳)『フィレンツェ日記』角川文庫, 1957 年刊.
- 23) 『森有正全集』(第 4 巻), 451 頁, 編集部「解題」.
- 24) 森有正『生きることと考えること』42 頁, 講談社現代新書, 1970 年 11 月 16 日刊.
- 25) 「リールケのレゾナンス」前掲書, 242 頁.
- 26) 同上書, 241 頁.
- 27) リルケ (森有正訳)『フィレンツェだより』前掲書, 51 頁, 傍点引用者.
- 28) 同上書, 22 頁, 傍点は引用者.
- 29) リルケ (大山定一訳)『マルテの手記』10~11 頁. 新潮社, 1966 年.
- 30) 森有正『パリだより』57 頁, 筑摩書房, 1974 年 1 月 10 日刊. 初出は, 「心に浮かぶよしなしごと」『東京新聞』1972 年 8, 9 月連載.
- 31) リルケ (森有正訳)『フィレンツェだより』前掲書, 旧版あとがき, 155 頁.
- 32) 「日記」1971 年 12 月 14 日 (火) 輝かしい日, 寒い. 『森有正全集』(第 13 巻) 375 頁.
- 33) リルケ (森有正訳)『フィレンツェだより』前掲書, 40 頁.
- 34) リルケ『マルテの手記』前掲書, 25 頁.
- 35) 同上書, 8 頁.
- 36) 森有正「パリ随想」『パリだより』所収, 57-8 頁, 筑摩書房, 1974 年 1 月 10 日刊.
- 37) 同上書, 8 頁.
- 38) 岡田 徹「廻廊の翳りの中で——フランス・ベネディクト会修道院の生活にふれて——」季刊『禪文化』95 号, 1979 年 12 月 20 日, 46-50 頁, 財団法人・禪文化研究所.  
《サン・ブノワ・シュール・ロワール》. フランス・オルレアン郊外にある「ロワール河畔の聖ベネディクト会修道院」. 創建は中世の初期 530 年頃. 以来今日まで, フランス革命後の一時期の中断はあるものの連綿と続いてきたローマ・カトリック教会の観想型僧院である.

39) 「日記」

- ① 1969年3月26日〈水〉曇り，寒い『森有正全集』（第14巻），85頁。② 同年4月13日〈日〉薄曇り，気温，かなり低い，93頁。

「アリアンヌへの手紙」

- ① 書簡8，1969年5月10日〈土〉，晴れ，555頁。② 書簡13 同年5月19日〈月〉，571頁。③ 書簡26，同年7月16日〈水〉，パリ，615頁。

いずれも時期は1969年3月～8月に集中している。

- 40) 「日記」1969年3月26日〈水〉曇り，寒い。『森有正全集』（第14巻），85頁，1981年12月10日刊。  
41) 注8)と同じ。森有正「アリアンヌへの手紙」『森有正全集』（第13巻），571-2頁。傍点，引用者。  
42) 伊藤勝彦「神秘主義者」（『森有正先生とぼく——神秘主義哲学への道——新曜社，2009年）。二宮正之「象徴主義」（「森有正の歩み」森有正をめぐるノート2 森有正全集第2回配本（第2巻）付録8頁。二宮正之『私の中のシャルトル』筑摩書房，1990年2月28日刊。  
43) リルケ『マルテの手記』16頁。  
44) 同上23頁。  
45) 同上23頁。  
46) 二宮正之「森有正の歩み」前掲書，8頁。  
47) リルケ『マルテの手記』27頁。  
48) 「リルケのレゾナンス」『森有正全集』（第4巻）249-251頁。  
49) 森有正『生きることと考えること』前掲書，16頁。  
50) 同上書，63頁。  
51) 日記，1971年12月14日（火）輝かしい日，寒い。『森有正全集』（第14巻）374-5頁。  
52) 「変貌」『森有正全集』（第4巻），初出誌，「展望」1967年9月号，10月号。  
53) 『生きることと考えること』前掲書54頁，傍点，著者。  
54) 海老坂武「解説」，二宮正之編『森有正 エッセー集成5』541頁，ちくま学芸文庫，1999年10月刊。  
55) 「日記」1969年4月15日（火）晴れ，肌寒い『森有正全集』（第14巻）所収，96頁。  
56) 森有正『古いものと新しいもの——森有正講演集——』前掲書，158頁。  
57) 「日記」1976年8月6日（金）〔原文＝日本文〕『森有正全集』（第14巻）前掲書，516頁。  
58) 『森有正全集』（第14巻）369頁「日記」1971年12月13日（月）温かさはやや後退した。  
59) 「巴里私記——1つの思想の誕生——」『森有正全集』（第4巻）所収，381頁，傍点はすべて著者による。  
60) 同上書，385頁。  
61) 佐古純一郎『森有正の日記』249頁，新地書房，1986年4月1日発行。  
62) 上田閑照『哲学コレクションⅢ 言葉』47頁，岩波現代文庫，2008年2月15日刊。  
63) 同上書，64-66頁。  
64) 同上書，66頁。